

第十二章 口碑伝説

○烏王の城と三宝様

西峰八木家の祖八木伊典（猪伝とも云う）という者、現在の土居に城を構えて烏王の城と名付け、二の丸、三の丸、天守まで築き数多の家来を集め威風あたりを払う勢であった。

当時安芸の領主、安芸国虎土佐制覇の野望あり、家来黒岩越前に数百の手勢を率いしめ、只一揉みに烏王の城を落さんと押し寄せた。その時八木伊典は家来の城下甚平、後屋源吾郎という弓矢の達人をして安芸勢に向わしめた。両軍対峙して動かざること数刻。この時黒岩越前谷岸に在りて鉄扇をあげ、

「一矢を得ん」と呼ばわるや、後屋源吾郎

「オー」と応えて弓を満月に張り、狙いを定めてヒョウと放せば越前の持ちたる鉄扇に的中、越前思わずこれを取り落した。

越前直ちに腰なる陣太刀を引き抜き、

「この矢如何」と呼ぶ。これに應じて後屋源吾郎の放った矢はあやまたず太刀の下緒を射切った。

ここにおいて黒岩越前、その弓術の長けたるに恐れ、戦うの不利をさと、兵をまとめその儘にうちおいて帰ったという。

今西峰に「ウチオキ」その下方に「ジョウゲ」等の地名が残っている。

かくするうち伊典兵糧を得んと、伊勢より外宮の大神、出雲より大国主命、讃岐より白峰の大神を勧請し三神を合祀して三宝宮と称し（現在の西峰高峰神社がこれである）。農民を集めて五穀豊饒、武運の長久を祈願した処、殊の他豊作、数年を経ずして兵馬大いに肥ったので、一族に三宝の宮及び三鉢妙見の祭祀を托し、主力を打ち従え本山郷にうって出でこれを占領、本山城を築き姓を本山と革めたと云う。



打置山の遠望（鞍部が笹越え）

現在の三宝様本社の地点が天主のあった所、通夜殿のあるところが二の丸、土俵のある所が三の丸の地点であるという。

昔から西峰に十月の初亥にイノコ踊りがあり、高峰神社の大祭もこの日に行われた。伊典を亥の日にあやかったものであろうか。

○豊永七観音の由来

聖武天皇の神亀年間（七二四～七二八）のことであるという。

当時怒田村の三津子野のナル（平野）の中央に榎の大木があった。この榎は見事な巨樹で朝日の影は川井村の岡田に、夕日の影は柚木村の岡田にまで及んだと云う。この大木の生えている附近は殆んど平地であった為、村人達はこの木を伐って跡を耕地にせんことを思いつき、一日村人こぞ拳こぶってこれを伐ったが余りの大樹のためその日のうちに伐り倒すに至らなかった。翌朝行ってみると木は元通りとなり切口がなくなっていた。その日も一生懸命総がかりで伐ったが矢張り倒すまでに至らず、翌朝行つて見ると昨日の通り元のままで切口もない。

このような事が数日に及んで村人達も漸く倦みはじめたとき、黒衣を纏まとった一人の旅僧が通りかかった。

「皆の衆はこの大木を伐られると云うのかな。」との問いに村人答えて

「さよう、この木を伐ったならば可成りの田畑が出来ますので、何とかこれを伐りたいと思ひ数日もかかりました
が………のことでどうしても伐り倒せず困っている所です。」

旅僧は

「それはさぞかし難儀のことであろう。それでは拙僧がその木を伐るべき方便を教えて進ぜよう」と告げ、木を伐る毎に切屑を皆焼き捨てるよう教えた。

村人達はこの教えに従って伐採にかかるると難なく切り倒すことができた。

この時旅僧が重ねて云うには

「この木は靈木であり尋常の木ではない。もしこの儘伐り捨てておいては村人に祟ることもあろう。しかしこれを仏体として祀れば却ってその功德も多いであらう」

と告げ何処ともなく去って行つた。人々は啞然として

「これは全く神僧であらう」

と不思議がつている所へ聖武天皇の勅命を奉じて諸国遍歴中の高僧行基がたまたま通りかかり、これを聞いて

「かの大木を七玉に切つて是を七体の觀世音に刻み、第一の本玉を第一番として中内村に、第二玉を川井村に、第三玉を怒田村に、第四玉を八畝村に、第五玉を粟生村本村(佐賀山)に、第六玉を西久保村に、第七玉を桃原村に安置すべし。」と伝えたという。

これを豊永七觀音といい古より靈驗あらたかなりと。(第九章信仰と神社、寺院の項参照)

また榎の木はこの由緒の故か、この地方では粗末に扱わず、正月に使う福クンゼとして重宝したものである。

○八川の上藤屋敷

八川の大西にある小松家の前、小高い丘に檜の巨樹があり、その下に小さな祠がある。古来姥神七社権現と称したが明治のはじめ、社名改称の制度によって若宮二社を合祭して、若宮七社神社となった。

さて、この小松家の家号を「上藤屋敷」と云う。口碑によると「大昔七人の京上藤が七匹の狼をつれてここで滞在



八川女藤屋敷と尊良親王の妃が通ったと
伝えられる往還

した。上藤が居る間狼は家の外で守っていて、やがて上藤と共に去ったと。」これが送り狼というものであるか。この姥神七社権現と七匹の狼の古事と、上古時代で述べた巫覡の配流と合わせて、私達は遠い昔の夢を追うのである。

註 上藤とは身分の高い婦人。平安時代二位三位の典侍。徳川時代御殿女中

○三谷の地名

屋島の戦いに敗れた平家一族の一人、平の景盛は少数の郎党と共に阿波より京柱峠を越えて豊永の地に入った。この間約二カ年、文治三年（一一八三）景盛が定着したのが西峰の三谷であった。「三谷家系図」に三谷の地名起こる所の由なりとあり、また系図の末尾に「藤之岩屋之旧蹟存矣」とあるが、藤の岩屋は今も現存している。

その附近には墓と伝えられる石や、金床石があったと伝えられる場所もある。

○高須の千人塚

秦氏の系図中七代兼元の条に「長宗我部土佐守、建武年間の人、豊永領主阿州人をかり集め岡豊へ来る。八幡はからい敗北す。今は阿波塚という。」とある。

この前哨戦の物語りである。

小笠原氏の率いる部隊が大杉の谷村「ジョウノ」までさしかかった時、これを阻止すべく長宗我部の一部隊が高須

の陣ヶ森にあって双方鉄砲の撃ち合いとなったが、小笠原軍の勢はすさまじいものであり、ついに渡河を許してつた。鯨波とぎの声をあげて殺到する小笠原勢を防ぎ切れず、長宗我部勢は陣ヶ森を撤し、その東方「トリゴエ」に集結したが陣容を立て直す暇もなく白兵戦に突入、ついに長宗我部勢は全滅したという。

この戦死者を葬った所を千人塚と呼び、里人が建てた祠が現存している。千人塚には山上であるのに吉野川の石が盛られており、ここに立ち寄ると「ホロセ」が出ると伝えられている。

○ 柚木高山神社の岩倉

屋島の戦いに敗れた落武者の一団が祖谷山から韭生に出で、更に笹をこえて西峰の蔭「打ち置おき」の城に來りし時、里人達は山賊の一隊が頭われたりと大いに怖れ、徒らに掠奪むすぶされるよりは隠さんと思い、各自穀物、衣類に至るまで老若男女を問わず全員担ぎあげ、高山神社の岩窟の中に隠したという。今尚この岩窟を「岩倉」と呼び、幕末の頃まで神社名も「岩倉神社」と称した。

○ 杖立山の送り狼

船戸村に儀右衛門という男があった。彼は十太夫の長子で後桜町天皇の明和二年（一七六五）に生まれ、嘉永三年（一八五〇）八十六才で死亡した。

記録によれば、十太夫の祖は応永九年（一四〇二）大砂子村に土着した新田氏の家臣桜井右京資友で、十太夫は船戸村界限かいはりでは右に出る者が無い程の巨財と金子を貯えていた。

ところが、「三代続く長者なし」の譬えの如くこの儀右衛門なる男、生まれつきの放蕩息子で、その散財ぶりたるや実に徹底していた。



笠松

一例を挙げると、旧暦二月十五日の薬師参詣に新調の足袋を着用（当時足袋をはく者はなかった）、家を出て船戸津の舟渡しを北岸に渡ると、この足袋を脱ぎ捨てて新しいものとはき替え、薬師様に到着してまた新品とはき替えたといい。見かねた妻が捨てた足袋を拾っていると、「かまわぬ、捨てておけ、お前と二人で一生使っても吾が家の財産を使い果すことはできない」と贅沢三昧にふけたが、晩年はさすがに貧乏になりみじめな生涯を終えたという。

この儀右衛門が元氣盛んな三十五〜六歳の時の話である。或る日、寺内村の「ござこ」にあった友人（某）と二人連れ立って、杖立の峠越しに山田（現在の土佐山田町）へ出かけたのである。

二人は道中楽しく話し合いながら峠の手前の舟石（舟の形をした大きな石が今もある）まで行くと、ここから道の下を一匹の狼がつけはじめた。（道の上をつけてくる狼は危険だとされていた）。途中「七まがり」の手前で道に飛び出した狼が二人の着物の袂をくわえて、道から少し離れた平らな茅の生えた場所に引き込み、「坐れ、坐れ」というようなしぐさをするではないか。

二人は、薄気味悪く思いながらもとにかく狼の指図に従って坐ることにした。すると今度は、二人の襟元をくわえて「寝ろ」とのしぐさ？二人は益々不審に思いながら木材を並べたように揃って草の上に寝たのである。ところが狼は二人をかかえ込むようにして腹ばいに覆いかぶさってしまった。あまりにも突然の不思議な出来ごとに、二人は一体どうなるのかと狼の腹の下で身をちぢめて声も出ない。

しばらくすると、山が荒れ、地鳴りがして魔人と呼ばれる集団がやって来た。魔人は二人を見て、「うまいさかながいるが狼様が取っているのでどう

にもならん」といって、狼のすごい気魄に恐れをなしたかのように通り過ぎてしまった。

やがて、山が元の静けさにかえると、狼は二人に立てと促す。二人は恐ろしかった一瞬を思い出し、ふるえながら立ちあがり峠を下って行った。狼は二人を送って北川の人里近い笠松というところまでつけてきた。

二人はここで、言葉の通じぬ狼に礼を述べ、持っていた弁当に火打ち石で火を打ちかけてこれを狼に与え無事山田に行くことができたというのである。

爾来、儀右衛門は息子の伊平や孫の達馬に「どんなことがあっても、杖立山で狼に鉄砲を向けるな」と子孫に云い伝えるよう、きつく命じていたという。

事実、この話は、今も尚子孫である船戸の中西家に語り継がれているので、まんざら嘘ではなかったのかも知れない。

○竜王の滝の主は福蛇か

明和、安永の頃というから今から二百年も昔のことである。

川井村と大平村高原の間を流れる宮の谷川の淵には古来福蛇が棲むと伝えられ、その近くに住む谷(家号)という家の百姓が代々供物を欠かさず、そのためか毎年五穀の実りもよく、平和に暮っていた。正月の御供えも高膳付きで供えたが、膳ごぜん毎吸い込まれるように消え、やがて吸物の蓋もキッチンと浮き上ったが、中味の吸物はキレイに食されていたという。

ある日、谷の当主金右衛門は「手斧てのきをもって直ぐ近くの山に薪を伐るためでかけた。仕事に熱中しているうち足をすべらし手斧をもったままくだんの淵にドボンとどび込んでしまった。一生懸命浮き上り漸く這い出たが手斧は淵に落したまま拾い上げるすべはなかった。

もともと蛇は金気を嫌うという。その嫌いな金気が(手巻)淵に留まっては主は居たたまれない。その夜棍ヶ森にある竜王の滝つぼに逃げこんだという。その逃げる際、立野、八畝の道筋には妖しい灯の点滅するのが川井村からよく見えたという。

福蛇に逃げられて谷の家は急速に家運が傾むいたと伝えられている。

これには余談がある。

その夜遅く佐賀山の松高家にきれいな娘が訪れ一夜の宿を乞うた。承諾した主もとこに対し娘は世話の成りついでに夜中に二度ほど身体に水をうってほしいこと。寝姿を絶対みないことを依頼した。主人は承知したものの水をうってほしいという娘の依頼に不審を感じ、約束を破つてのぞいた処、大蛇が座敷一ぱいとぐるを巻いていたという。

あくる朝丁重に礼を述べて去る娘のあとをつけた主人は、その娘がすべるように加持ヶ仁保の竜王の滝に入るのを見た。その主人は翌日から枕も上らぬ大病を患ったという。

福に見放されたはなしである。

○猿猴(エンコウ)のつべ抜き

豊永地方の方言で肛門(尻)のことを「ツベ」という。土佐の各地にもいたように豊永地方の川にもエンコウが棲んでいて、人をだましたり、いたづらしたりしたが、エンコウは特に人間様の「ツベ」を抜くのが好きであった。ごく最近まで盆に川へ行くとエンコウに尻しつを抜かれるから行ってはならんと両親は子供達に教えていたものである。

さて、川井村の百姓が用があつて下土居にでかけた。その途中大きな荷物をもった旅人が休んでいるのでたづねた。

「おまん、何処へ行くんなら」

「おらか。おらは讃岐の満濃池へ行く途中ぢやが、身体が乾いて歩くのがシンドイ。そこで休みよつたが、どうぢ

やろう。銭は気に入ったばあぢうがこの荷物を背負うてくれまいか」

銭をなんぼうでも気に入っただけ払うというのに欲を起した百姓は早速引き受け、荷物を背負って歩きはじめた。ところがこの荷物見かけよりもグンと重く耐えかねて路傍に荷をおろし一息ついた。その時何気なしに荷物を見るとその後側に何か書いてある。よくみると「われ（豊永では相手のことをわれともいう。）のツベで一〇〇ツベ」と書いてある。びっくり驚天した百姓はとんで逃げたという。

註 この旅人は勿論エンコウであり、満濃池でこの百姓の尻を抜いたら丁度一〇〇の満願になるところであった。

○悲恋おけさ岩

峰の部落の奥に今も「おけさ岩」という岩屋がある。

何時頃であつたか角茂谷の名本に八畝村から奉公に来たおけさという娘があつた。温順でよく働く娘であつたが、木々の新芽が吹き出す頃、胸の奥深くほのかに娘心の痛みを感じるようになった。相手は名本の近所に住む若衆で越平ひらという男である。何時ともなしに相寄る二つの魂は若い二人を固く結びつけて了つたのである。しかし悲しいことには双方の両親は一緒にすることを認めないばかりか、おけさは両親によつて八畝に連れ戻された。反対や抵抗があればあるほど燃え上るのが恋というものである。遠く山を距てて恋しさのつる一方であつたおけさは遂に意を決して八畝から角茂谷に通い始めたのである。

一夜の逢瀬に胸をはずませ、娘の身で人里稀な杖立峠を越しての百夜通いは随分寂しいことであろう。

一方越平も夜更けて人目をしのび堀切りの峻険をよむて峰の奥におけさの来るのを待ち焦がれていたのであつた。おけさは雨の日も風の日も一日も欠かさずこの峰の岩屋に通つたという。

この恋は結局結ばれず、二人は心中したという哀れな恋物語りである。

当時の俗謡に

「きった、きり雨かざんざの雨か、

八畝おけさにやあきはてた。」

というのがあり、一説によると越平がおけさに厭いた為おけさが無理心中したとも云う。

○六反の七人御先

角茂谷村西之川の向いにコウダイラという処があり、其処に西岡という家があった。今から百数十年前のことである。

土地の習慣として正月にはカドアケ(門明)に行くのであるが、コウダイラの西岡の主人も山口にある本家の西岡家へ行く筈をしていた。本家でもコウダイラからカドアケに来ることを例とし、酒着を用意して待っていた。

その頃コウダイラの西岡家に奉公に来ていた杉村の善助という者がいたが、如何なる恨みがあったのか、突然変心して西岡家の主人以下七人斬り殺してしまった。この時西岡の妻は余程気丈な者であったと見え、子供を小脇にはさみ、手杵てぎで防ぎながら山口の方へ川沿いに逃げようとしたが川辺にある楮株かじかぶにつまづいた処を追討に斬られた。今でも角茂谷川に楮株かじかぶの淵という名で残っている。

このようにして善助は家族を皆殺しにした上家財道具、食糧に至るまで掠奪して逃げた。

一方本家である山口の西岡家の主人はカドアケに来るのが余り遅いのでコウダイラに見に来た所、この有様に仰天し、忽ち角茂谷村をあげての大騒動となり、正月の喜びは一変して恐怖の巷となった。

村人達は八方手分けをして善助を探したが、杳として行方が分らない。このため峰に住んで家祈禱やぎとらでは名のあつた小笠原惣太夫という神官にたのんで「マワリジキ」という祈禱をうってもらった。

その頃善助は領石の手前の外山セヤマに逃げるべく、外山の谷の石橋を二つ渡り、三つ目にかかった時不思議にも突然足が動かなくなつてしまった。惣太夫の託宣で善助の居場所を知つた郷廻りの役人たちは動けなくなつてすくんでいる善助を難なく捕え、磔はりつけとしその首を角茂谷の下しもにある六反むさに晒した。

それ以来其処には奇怪なことがあつたと見えて、人々は「七人御先」と云い恐れて近づく者もなかつたと云う。善助の首を晒すのにシノベ竹を立てて晒したと云い、そのためか角茂谷の百姓達はシノベ竹を今でも忌み嫌うといふ。

小笠原惣太夫については次のような挿話が残っている。

彼は各種の祈禱に長じていたが、とりわけ弓祈禱が上手で、その評判は遠く城下まで聞えていた。ある時、家老某の家に呼ばれたが身分が違ふため、彼は家老より下座に座つて神前に向つて祈禱していたところ突然彼に神が憑依して「神の取次をする者の座が下座である。神に対し不敬なり、神の託宣を授けるわけにかん」といふ。家老も尤のことと思ひ彼に上座を与えると「この家の不幸の原因は犬神がおるからだ」といふ。怒つた家老が証拠があるかといふと、それでは証拠を見せようと小糠（米糠）三合を前に置き弓を叩くと家老は四つ這いになり小糠に食い付いて「ワンワン」と犬の真似をし正気の沙汰とも思えないので家族の者は大いに驚き彼に詫びを言つて許してもらつたことである。また、このことが評判となり、藩主が病氣となり、薬石効なく日日に衰弱していく。心配した家老が再び惣太夫を召して、殿様の病氣についての神託を請うと、水が原因している。水元に狸の巢があつて、狸の小便が飲み水に入つているとのこと、調べてみるとその通りであつたので、早速狸を捕え巢穴をふさいだ処殿様の病氣も全快した由である。

○大血の川

角茂谷村の西之川の向いに「おうちの川」という処があり昔はここに猿猴が居たと伝えられている。何時の時代であらうか、瓜生野の下のコブシ谷の一軒家があり、そこに「かなぐま」という子供がおった。

七月のある日、かなぐまは両親と共にイノアシの田圃へ草取りに行ったが、その帰りあまり暑いので「わしは水を浴びてくる」といってかなぐま一人で川へ行った。

両親はかなぐまの帰りが余り遅いので川に行ってみると猿猴に引っぱり込まれて肛門を抜かれずに死んでいた。そして川には一面真赤な血が流れていた。それ以来そこを大血の川と呼ぶようになったと云う。

その後峰に住んでいた「キク」という女が用事があつてその大血の川のふちを通っていると川向いの大岩の上に棕櫚の毛をかぶつたようなものがパッサパッサしていたというが、キクは気丈な女であつたので、「またエンコウが出ちよる」と云いながら平気で帰つたという。

○釜の尻の猿猴えとち

西之川の向いに山の神を祀っているが、その少し下流に釜の尻という淵がある。

昔のこと、一人の女が田の草取りに夢中になつてると淵の中からエンコウがこのこ出て来て「俺も草を取っちゃろ」といいながら畦から田へ入らずに長い手で草を取り出した。女は気丈な人ではあつたが流石に心細くなつて、もし肛門を抜かれては大変だと思ひ急いで家に帰つて茶釜の蓋を取り、これで尻に蓋をして又田圃へ草取りに出かけた。するとエンコウが云うことには「いど、を抜いちゃろうと思つたが、金かねがあたつてゐるから嫌ぢゃ」と云つてこの元の淵へ入つて行つたという。

この里では猿猴は金物を嫌うものだと云われている。また釜の尻という淵の名もこれからついたものだといわれる。

○馬瀬の淵と蛇神

馬瀬と角茂谷との間を流れる穴内川に大きい淵があるが、これを馬瀬の淵と云い昔は深さが三十三尋もあって、蛇身が棲むと伝えられていた。

数百年も昔のこと、西岡十万という落人がやって来て馬瀬のオホシロに落着いた。その頃の馬瀬や角茂谷一带は人里離れた深山で、ましてこの淵の如きは近寄るにも怖ろしい処であった。

あるときこの十万が馬瀬の淵で鵜を使った。ところが鵜が一度すみ込んだきりどうしても浮び上って来ないので、これは不思議と根が豪胆な十万のこと、裸になって潜み込んだ。すると先へ先へ深い穴があり奥へ行くと水が無くなって非常に美しい御殿があり、丁度浦島の竜宮城の如くであった。そこに例えようもない美しい女神が機を織っており、十万の放した鵜がとまっていた。

女神は十万をかえりみて、「ここは人間の来る所ではない。早く帰りなさい。さもないと命がないですよ」という。西岡十万は自分ではたしか三日三晩と思ったが、帰ってみると三年の月日がたっていたと云う。

○柴折坂の狸

小川村の枯谷に高橋久太夫という神職があった。ある日馬瀬に祈禱に行き、帰る時はすでに夜になっていた。丁度その夜は月があり、振舞酒の良い気分でサカイ谷を過ぎ枯谷へ上りはじめた。

ところが柴折坂を半ば過ぎたと思う頃、うしろの方でガンタラガンタラという音がする。はじめは谷川の水音かと

思ったが、どうもオカシイとふり返ってびっくりした。なんと鍋がついてくるではないか。久太夫が歩くと鍋も歩き、止まると鍋もとまる。

ガンタラガンタラと奇怪な音をさせながら久太夫は一目散に家にかえった。鍋は家の近くで止まったという。久太夫は蘇生の思いで家に帰ると早速隣家の仲蔵に話をしたところ、

「鍋が人を追った例がない」と一笑に附して了ったのでその話しは立消えになったが、それから一ヶ月位たって馬瀬に用があり夜に入って帰路についた。

薄暗い月の光りを頼りに馬瀬の下のシモヨケという処までやって来たところ川向うの大岩の掘くれたところから瘦せた裸の男が藁わらの松明たいまつを、

「よう明るか」

とニューッと久太夫の方へささげた。そのとき藁束の火の灰が大岩より五間もあるこちら岸へ川を距ててポロポロ落ちたという。

昼間ですら容易に行けない処へ、この夜更け、人のいることさえ不思議なのに、この広い穴内川に届くほど長い手をしたものは人間ではない、妖怪に違いあるまいと久太夫は怖れ、おののいた。

更に怖ろしさはそれだけではなかった。

久寿軒橋のすぐ下までくると椎の古木がある。そのしたに淵がある。その淵で突然バリバリという音がした。ハツとする間もなくバサンという音が続いて起った。「何んぞ」と思ってみると「茶ゴリ」のようなものが向うの川岸の方へ泳いでいた。

註 茶ゴリとは碁石茶の容れもので錠を綴ったもの。

久太夫は茫然の態にて早々家に帰ると又仲蔵にこの話しをしたところ

「茶ゴリが川を泳ぐというのは聞かんぞ」

と云って笑うので、久太夫もついに、

「お前は人をワヤにして話しを真面目に聞いてくれん」

と大いに怒ったと云う。

昔から小川の枯谷への上り口に大岩があり、そこを柴折坂といつて狸がよく人を誑たぶらかかしたと伝えられる。

○水神石の狸

久寿軒の川下に二軒の百姓家があった。

その近くに水神石という石が川中にあるが誰云うともなくその石の上に毎晩きれいな娘が出てくると云う噂が立った。また「あれは仲々きれいな娘ぢやがものを云わん、なぜぢやろう」ともいう。

その時分久寿軒のコミという所に喜作という獵師が居た。この喜作がこれはたしかに狸の仕業にちがいないと思ひ、ある晩犬をつれ鉄砲を担いで行った。ところが喜作が犬を連れているのを見た娘が、はじめて口を開いて

「喜作、犬をくるめえよ」と何辺も叫んだ。「おのれ狸め」と喜作が一発うつと狙い違わず娘はバサンと音を立てて水中に落ち込んだ。やがて喜作は娘を水中から往還まで引上げて、葦を借りこれを着せて番をしたが、夜が明けて日がさしてくるに従い、娘の体にじつと毛が生え、狸の姿に戻っていったという。

○北川の七人御先

北川の本村に七人御先という処がある。

七百年の昔のこと、杉本家の老婆が年の暮、餅を搗いている所へ平家の落武者七人が、「自分達は戦に負けて此処

まで落ちて来た。生きて甲斐のない身であるから七人が刺し違えて死のうと思つたが余りの空腹のため力がなくそれも出来ぬ。どうか殺してくれ」と云つて土間に七人が転び込んだと云う。

老婆も可哀そうに思つたが、かと云つて七人も養うわけにもいかないので、一そ一思いにと菜庖丁で七人の首をはねた。この死骸を葬つた所を七人御先という。

北川の奥に小庭という所がある。ここに千人塚と呼ばれる地名があり、昔平家の落武者が遁れて来たものの食うものがなくなり、刺違えて死んだ処と云う。

この千人塚には一ヶ所だけ雪の積らない処があり昔から黄金が埋められていると伝えられる。

○野鹿の池の伝説

大豊町の立川三谷、奥大田と徳島県山城町平とを結ぶ頂点に野鹿の池山（一二九五）がある。この山の頂上にブナや石楠花の原始林に囲まれた沼沢がある。土地の人はこれを野鹿（ぬか）の池とよんでいる。

今から四百数十年も昔の事である。安芸郡の田野町に枡屋と云う米屋があり、そこにお藤という一人娘があつた。お藤は年頃であり美人で優しかったので、あちこちから婿養子の話があつたが、仲々よい返事をしない。そのうち十九才の春を迎えたので、両親も心配して来年は二十才にもなるが、何時迄も養子を迎えないのでは外聞も悪い。何か身体にでもと心配してお藤にきくと、

「私は人並みの娘ではないのです。どうして養子など迎えられよう」と泣くばかりであつた。そこで両親が更に問いつめるとお藤は、「私が人並みでないことは夜中私の寝姿をみれば分ります」という。

その夜半の事、両親は人並みでないお藤の身体とは、と案じつつ娘の寝間をのぞくと、八畳の間せましとばかりとぐるを巻いている蛇身をみて肝をつぶした。

どうして人間の子が蛇身に變化したのか、娘は昔から、枅屋が「二枅ふたば」といって枅に上げ底をし売るときにはこれを使い、買うときには上げ底を外したり、「二秤ふたぢりょう」といって分銅をごまかして数多の人をごまかし身上を肥やしたその罰という。その夜は親娘三人抱きあつて因果応報の宿命をのろい泣き明かしたが、結局娘の云う通り家から暇を出すことになった。

六月の中旬お藤は、両親に別れを告げ、その日暮れ立川の「ヲカタレ」にたどりついた。ここには老夫婦の住む一軒家があつたので一夜の宿を求め、翌朝お礼にと一袋の米を差出した。喜んで礼を云う老夫婦にお藤は、

「どうぞ私の行き先を見ないで下さい。それを堅く守つて頂けるなら、この一袋のお米は御当家一代困らないだけの御米になるでしょう」と云い残して家を出た。老夫婦はお藤の余りの美しさと、先程の言葉に不審を抱き、お藤の閉めていった戸の隙間よりのぞき見して仰天した。そこには黒雲に乗つた大蛇が野鹿の池の方向にすさまじい風と共に去っているからである。

見ないでと頼まれたのに見た罰か、その黒雲が野鹿の池の上空に届いた頃、老夫婦の家は一枝くべた囲炉裡の火から忽ちにして焼けて了つた。その後焼跡の灰を一ヶ所に集めた処に一本の檜の木が自生し、数百年間生成として伸び、ここに移り住んだ川井家は大いに栄えたと伝えられる。

さて老夫婦の話から野鹿の池に住みついた娘、お藤のことが池田大西城の主（大西元高という）に聞えた。そこで城主は領内見聞を機会に供侍二十余名を従え、野鹿の池に登り、大声して曰く。

「ここに土佐、田野米屋の娘が居るとはまことか。まことならば不都合なり。ここは大西領なるぞ、速やかにその正体見せよ」

しばらくして一頭の鹿が出て来た。そこで城主は

「ここは深山故、鹿も居よう、まことの正体見せよ」と呼ぶと一匹のがまが出て来た。城主更に声を大にして

「ここは池故がまが居ても不思議なし、正体みせよ」と強くせまると、突如として天地に轟くばかりの雷鳴と共に、一天俄にかき曇り大暴風雨となる。その中に身長十数米、胴廻り数米に及ぶかと見られる大蛇現われ、

「私が米屋の娘、お藤です。どうぞこの儘此処に住まわせて下さい。」と姿に似ず優しい声で城主に嘆願するそのさまに居合わせた従士達は大半氣を失う始末、城主は辛うじて勇を鼓し「相分った。娘よ静まりあれ、この池の川尻を吉野川の青石をもって堰止め、水を豊かにして大池神社として祀ることを約束せん。」と……その城主の言葉の終るや瞬時にして大蛇の姿は消え、元の静寂に戻ったという。

この日は旧暦六月十七日であった。爾來土地の村人たちはこの日を例祭として祀りを欠かさないと云う、また川尻を堰きとめた青石も現存している。

哀話野鹿の池の伝説である。

○まけあれ

嶺北の地方では現在でも「マケアレ」という土地が散在し、そこには大きな「蛇」が棲息していると云われ、山仕事や、農作業の上にも少からず制約を加えている。

船戸の薬師橋の下流約五百米の附近に「くるめぎの淵」と称する底の深さを知らぬ淵がある。この淵から更に二百米下流の地点にある水田の中に疊五帖敷ほどの真黒い石があり、この石の上にある「祠」を土地の人は、黒石様と呼んでいる。また此処から二千米ほどのぼった庵谷部落の山上に黒石山という「マケアレ」があり、ここにも小さな「祠」がある。

以下はこの三つの地点にまつわる伝説であるが、大杉の中村大王や天坪の久寿軒、北川地区では大王の上のボーダ山に「七荒れ」と云う処があり、そこにも大蛇が棲んでいると云われていた。



黒石様とイタヤ屋敷跡(左)



夕闇せまる(車切り)くるめぎの淵

頃は藩政中期とも末期とも云うが定かではない。

この黒石様の隣に「いたや」(今もいたや屋地と呼ばれ水田として耕作されている)という富農があった。

この「いたや屋敷」に花さんと云う大変気丈なばあさんがいた。或る年の夏十三人の日傭人(八人とも云う)を雇い、これに奉公人をつけて黒石山へ「ソバ山」焼きに行かした。

ばあさんはあとに残り、日傭人のために弁当をつくりこれを背負って山を

登った。途中庵谷の鳥居のあたりまで登ると一人の白髪の老人が静かに鳥居の下に立っており、ばあさんの行先を聞き、今日の山焼きは止めるようにすすめたが気丈なばあさんは返答もしないで山を登って行った。目的の山の下まで行った時、目玉一つ、足一本の不思議な小坊主が降りてきて、この山に火を入れることを止めなければ、お前の家に行き帰りを待っているから、早く帰るようにと云って山を下りた。

山で弁当を渡したばあさんは、気丈夫ながらも今までの不思議な出来事を考えながら家に帰ってみるとこわいかに茶の間の「いろり」の自在に、長さ一丈余りもある大きな「ヘビ」が巻きつき、かまくびをもたげてばあさんをじろりじろりと見ているではないか。

驚いた花ばあさんは、先程の山で逢った坊主だなッと判断し、近くに於いてあった大工の「はつり手斧」でへビに切りつけ九つの輪切りにしてしまった、ところがその切り口が次々とへビの口になるので、さすがの花ばあさんも大いに驚き、飼犬の黒を呼んで流れ出た血を「黒ねぶれ、黒ねぶれ」となめさせてしまった。そして何食わぬ顔で夕食の用意をして、奉公人や日傭人の帰りを待っていた。

日が暮れて山から帰った人々に五目めしと地酒を振舞い、良い気持ちになって帰る日傭人に、庭に置いてある「フゴ」の中のものを下の川に捨てるように頼んだ。日傭人は「フゴ」の中の巨大な「へビ」の輪切りに腰をぬかさんばかりに驚いたが、酒の勢も手伝って皆でかついで下の川に捨ててしまった。

ところが此の日から四日目に飼犬の黒がころりと死んでしまった。不思議に思いながらも黒の死骸を黒石の下に埋めた。これをはじめに「いたや」には不可解な不幸が次々と起り、さしも富み栄えていた「いたや」は数年を経ずして死にたえてしまった。

いたやが亡びると今度は部落に不思議なことが起りはじめた。困り果てた部落民は、神主に頼んで貰ったら、すべては氏神の教えも聞かず黒石山の「へビ」を殺した「たたり」であるということが判った。

爾来、土地の人々は黒石山を「黒石荒れ」と呼び一定の区域内は手をつけず、黒を埋めた石を黒石と呼び「ほくら」をつくって祭ることにした。歳月が経つにつれて人も変り黒石様の祭りもおこたり勝ちとなったが、不思議なことに、祭りをおこたると山の持ち主の家に病人やけが人ができ、黒石部落の稲は全滅の不作に見舞われた。黒石山の持ち主は転々と変ったが、山の神祭りの二十日には酒肴を供えて手厚い奉仕をおこたらないようである。

終戦後、黒石様の祭りを三年間止めてしまったことがあった。すると部落の稲作に不作が続ぎ、再び祭りはじめ、十月の亥の子には今も尚祭りをかかさないうである。

「へビ」を捨てた川原は今「車切り」から転じて「くるめぎの淵」と呼ばれ、気味の悪い底知れぬ淵と化してい

る。

○魔人と鶏の目釘

永正年間というから今から五百年の昔のことであるが、勿論定かではない。

寺内村の神社に夜毎魔人が出没するとの噂さが流れ、これを恐れた村人達は誰一人、神社に参拝する者もない。

これを聞いた神官笹岡暮日は肚の座った男であり、「世人を恐れぬ妖魔、いでや退治して呉れよう」と夜中ひそかに神社に泊り込み、魔人の出現を待ちうけた。それより三日目の夜中、若い女が子供を抱いて暮日の前に妖艶たる風情で現われた。

待ち構えた暮日は「おのれ魔人、そこ動くな」と一声呼ばわるや、いきなり刀を抜いて斬りつけた。そのとたん「ガチッ」と音がしたと思うと刀の目釘が抜けて拝殿の柱に突き刺さったかと思えるや、目釘の鶏の模様が突然「こけっこうこう」と啼いた。その一声を聞くやくだんの魔人は「すうー」と消えて了った。

そのあとに刀の傷のついた川原の石が一つ残されていた。その後魔人は二度と姿を見せることはなかった。刀の傷のある川原の石は今尚神社に残されていると云う。

その神社とは寺内の若一王子宮である。

○猿えんこと魚の話

頃は藩政の中期か、豊永郷は下ノ土居村オメヂにあつた百姓とエンコウの話である。

その頃の百姓は牛馬を追い出して下の吉野川できれいに洗い河原につないで爪を乾かすなど農繁期ともなれば特に家畜の足の手入れに専念したものである。

ある日その百姓は馬を川につれて行ききれいに手入れをして河原につないで帰った。夕方になって、川に行つてみると、エンコウが馬の手綱を取つて川に引き込もうとしていたが、馬の力がつよく反対にエンコウを陸に引きあげてしまった。そのはずみで頭の皿に水気を失なつたエンコウは、全く力を失ない手綱に足を取られて息もたえだえになつていた。

百姓はこの力の抜けたエンコウを生捕り家につれ帰つて鎖でつないで飼つていた。ある日エンコウは涙を流しながら、自分の悪かつたことを詫び釈放して元の川に帰してくれるなら、毎日川魚を取つて来て家族に魚の切れ目がないようにするし、田の草は全部わしが取つてしんぜると云うのである。百姓はエンコウに念押しをした上で川に帰してやつた。

エンコウは約束を守つて早速その翌晩から毎夜のように軒端につるした「かご」の中に家族のみでは食べ切れない程の魚を入れるようになった。毎朝起きてみれば「かご」から魚が溢れ出る始末。加えてエンコウは手が長いことから、田の畦から全部の田の草をとつてしまう。何ヶ月か経つうちに約束はしたものの何だか薄気味悪く思い出し、魚かごをつるしてある木の又を鹿の角ととりかえてみた。ところがその晩は魚を入れてあつたが、その翌晩からエンコウは魚を持つて来ないようになったとのことである。

こうした伝説を裏づけるかのように豊永駅下方の国道と吉野川の中間に、エンコウ田、エンコウ池など古えの名残りを留めるにふさわしい名称の田んぼと池がのこっている。

なお、鹿の角は魔除けに使用されたもので昭和の初期頃までは、百姓達は牛馬の鞍又は頬くり、胴乱の紐などに魔除けのまじないとしてつけていたものである。



千古の謎を秘めた箕淵の景観

○箕淵の伝説

その昔、寺内村の「榎」に明光院という寺があった。この寺は元、本山領主本山頼則盛政が本山郷寺家に開山創建したと伝えられるが、永禄三年（一五六〇）本山氏は長宗我部氏との戦に敗れ、のちに八代の孫僧観海が豊永郷寺内村に移したものである。（現在は寺院の名称のみが記録としてのごされている）

この明光院に権大僧都智海房という住職がいた。この住職と箕淵とに次のような伝説がのこされている。吉野川と支流奥大田川との合流点から約一キロ程遡った処（寺内と石堂の境）に底知れぬ淵がある。兩岸からの奇石怪巖と汧湲の響きは、千古の謎を秘めて蛇神の淵にふさわしく今も尚云い知れぬ無気味さをただよわせて単身では容易に近寄り難いものがある。この淵は箕をふせたような形をした淵が三つ連なっているところから「箕淵」または「三淵」と呼んでいるがそのどちらが正しいのかは定かでない。

祭神は雨宝水神で雨乞いの神、福蛇の神としてあがめ祀られているが、現在でもこの淵の蛇神の「たたり」は恐ろしいものとされており、とりわけ蛇神は金属類を忌み嫌うところから、蒿口や鉈、鋸等を持った杣師達もこの淵には入ろうとはしなかった。木材を流す場合にも箕淵まで来ると岸を迂回して、淵下から流材の作業をしたようである。さて、話は明光院の智海房であるが、豊永郷に大旱魃があり農民達はあの手この手で雨乞いをしたが何の効果もなく困り果てていた。

智海房はこのとき、生命をかけて箕淵にこもり、雨乞いの荒行に入ったのである。ところが何のはずみか手に持っていた「ほら貝」をこの淵に落し込んでしまった。智海房はこのほら貝をとりに行く為、千日がかりで鍛えたという

「関の小刀」を口にして淵底にすみ込んで行った。すると奥釜のあたりに水のない場所があり、きれいな部屋の中で美しいお姫様が機を織っていた。

お姫様は智海房の来訪に驚いた様子であったが、やがて部屋に案内し、四方扉のうち北の扉は絶対に開けぬよう智海房に云って、ご馳走の準備のため部屋を出て行った。そこで智海房は、めずらしいこともあるものよと早速南側の扉を明けてみた。そこには百花咲き乱れた美しい春たけなわの景色があった。東の扉を開いてみると真夏の季節である。西の扉を開くとすっかり紅葉した秋の景色が眼に映った。好奇心にかられた智海房は、お姫様から禁じられていた開けてはならぬ北の扉を開いてしまった。ところがそこには野鹿の池の毒蛇がとぐろを巻いて寝ていた。

智海房は、おそいかかる毒蛇を関の小刀で払いのけていたがあやういところをお姫様に助けられて無事難を免がれ、山海の珍味をご馳走になり、三日間滞在してお姫様に別れを告げて帰ってきた。ところが寺内村では智海房が行方不明ということで大さわぎをしたが、やがて「あきらめ」に変わり、三年目を迎えてその法要を営んでいた。

箕淵での僅か三日間の逗留が三ヶ年にもなつていようとは智海房はもとより寺内村の住民達もさぞかし驚いたことであろう。浦島太郎ならぬ箕淵は竜宮城の伝説である。

○豊永の方言

高知の人から豊永のもんは「妙に声をひく」と云われる。豊永言葉は東西豊永が本場で、穴内以西になると「本山言葉」に近い。

豊永の「蜘蛛」は他所の「雲」になり、「箸」は「橋」になる。アクセントの違いである。

例えば高知では黒いを「クローイ」、固いを「カッター」というが、豊永では「クローイ」「カタイー」であり、これは幡多地方と語法的に共通するという。

幡多の一条文化、豊永の巫覡文化、平家の落人文化の影響であろうか。そういえば豊永の方言に、

「仕あされ」 (下さい)

「食わっしゃれ」 (召上れ)

「上らっしゃれ」 (御上り下さい)

「行かさんせえ」 (行っただけで下さい)

「茶をたべる」 (御飯をたべる)

など、そういう語源を感じる方言がある。豊永の代表的な方言を挙げると、

「ずびまわる」 (歩きまわる)

「足がすくれた」 (足が疲れた)

「じょうに」 (たくさん)

「うんだあ」 (私は)

「そんがなこと」 (そんなこと)

「知らんぜや」 (知らないよ)

「うのけになる」 (我を忘れて)

「いお」 (魚)

「でっしら」 (たくさん)

「けたばんし」 (山の上の衆)

「おなごし」 (女子衆)

「降っとる」 (降っている)

「この穴はしきい、しきい、はっとる」

一つの例話を出してみよう。

「お前何処へ行つとったぞのうし」

註 おまんとは云わない。

「わしか、わしや立川のおんごくへ、きゆう出しに行つとった。けんどあそかあ、ばらうづつそうで、しようまつこと、めるけんのう」

「そりやあ、ずるうないのうし。けんどあつこらあにやあ、ええ木がでつしらあるろうのうし」

「かなりのもんが、あるのう。どうしようつうたつて、四人も居るけんど、いごかんようなのが、大方ぢやけんのう。それでも四十日びやあ行たら、出てしまろううって、云いよるんぢやが」

「どうぞよ、近くは山師も、ぜにがふといけに、めつそう、ええ買うまいのう」

「さあ、めつそう話しよつても、いくまい。こいさりやあ、よりあいがあるつうけに、そんならおしまいなさんせえのう」

(この穴は奥へ奥へ入っている)

(私は立川の奥へ木を出しに行っていた。しかしあそこは茨の原で、本当に気が滅入る)

(それは大変だね。(尋常でないの意)けれどあの辺には良い木材がたくさんあるだろう?)

(可成りの物がある。何と云つたつて四人もかかつて動かん位のが大半だ。それでも四十日もすれば、済むだろうと話している所だ)

(どうです?近頃は材木商も価格が高いので買付も積極的ではあるまい)

(どれ余り長く話し込んでなるまい。今晚は寄合があるということだ。では御仕舞なさい)

立川、川口あたりになると、参勤交代の通路であった故か、高知周辺の方言の影響をうけており、本山のアクセシ

トに近い。むしろ大川、本川のアクセントが豊永に共通している面が多いようである。(註 この項四国山脈より)